



広島オーストリア協会

# 会報 No.29

平成18年4月30日発行  
編集・発行／広島オーストリア協会  
〒730-8552 広島市中区白島北町19番2号  
広島ホームテレビ 秘書室  
TEL(082)221-4964 FAX(082)221-4731



▲インスブルック市街



広島オーストリア協会 会長  
在広島オーストリア名誉領事

橋本宗利

会員の皆様には日頃広島オーストリア協会の活動にご協力とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

さて、昨年度の広島オーストリア協会では、6月に総会、7月にビアホールの会、初秋にはオーストリア親善訪問の旅、10月にクラシックコンサート、さらに12月にはクリスマス例会、3月に講演会と幅広い内容の活動を行いました。

特に、28名の大訪問団となったオーストリア親善訪問の旅は、ミュンヘン、プラスチラバなど近隣諸国都市も訪問し、ウィーンでは奥日協会（ウィーン）と友好提携の調印を行いました。奥日協会は今年秋に来広する予定でありこの機会を利用して更に友好関係を強化したいと考えています。

7月のビアホールの会は初めての試みとしてバスをチャーターし広島市近郊のビアレストランで行ない、瀬戸内海の夕日をバックに生演奏やダンスで夏の夜のひとときを楽しみました。

11月にはオーストリアの至宝、ウィーン・フィルハーモニアのコンサートマスターが加わったピアノコンサートが開かれシューベルトの「ます」など日本で人気のある曲を披露しました。モーツアルト生誕250年の今年は、6月にモーツアルトの故郷ザルツブルクからザルツブルク室内管弦楽団が来広する予定です。

協会では、今年も皆様のご期待に添うよう活動の充実に努めてまいります。会員の皆様の積極的な行事への参加をお願い申し上げます。

## 総会報告



- 平成17年6月9日（木）18:00～20:00
- 広島全日空ホテル3階オーキッド
- 117名

広島オーストリア協会の通常総会が広島全日空ホテルで行われました。今年で17回目となる総会には117名が出席しました。はじめに当協会の橋本会長が「昨今の長期不況の影響で他の二国間協会の会員数が減少している中、ほぼ同数の会員数を維持している当協会は健闘している方だが、組織の維持強化のためにはさらに会員を増やしたい。本年度はオーストリア親善訪問を予定しており現地の日本協会と友好提携協定を結ぶなど意義のあるものにしたい。」と挨拶しました。

続いて行われた懇親会では、駐日オーストリア大使館のオーバーマイマー文化担当官が挨拶し「国と国、人と人の友好関係は極めて大切なものです。皆様の協会は広島の

オーストリアへの理解と親善を積極的に進められており、世界平和を求める両国の親善に貢献されると思う。」と述べられました。

乾杯では田中副会長が「3月に来広されたペーター・モーザー大使は、文化交流の他経済交流にも意欲を示されていた。皆様も積極的にオーストリア協会のイベントに参加し、いろんな交流を深めてほしい。」と挨拶しました。

また、東京で幅広く活動をされているピアノ演奏家の下祐子さんが「シューマンのアラベスク作品18」など3曲を軽快なタッチで披露するなど和やかな雰囲気の中終了いたしました。



## 平成17年度事業報告

### 平成17年度理事会・総会・懇親会

6月9日(木) 広島全日空ホテル (参加者:117名)

### 第12回ピアホールの会

7月26日(火) マリーナ広島 (参加者:75名)

### オーストリア親善訪問の旅

8月31日(水)～9月7日(水) (参加者:28名)

主な訪問都市: ウィーン、インスブルック、ミュンヘン、プラスチラバ

### ウィーン・フィルハーモニア・ピアノ五重奏団

10月25日(火) 広島国際会議場フェニックスホール (参加者:1,158名)

### クリスマス例会

12月13日(火) リーガロイヤルホテル広島 (参加者:180名)

### 講演会・懇親会

3月14日(火) 広島ホームテレビ (参加者:97名)

## 平成18年度活動予定

### 6月9日(金) 平成18年度理事会・総会・懇親会

6月24日(土) ザルツブルク室内管弦楽団(広島市貯金ホール)

### 8月 ピアホールの会

11月 境日協会来広・歓迎レセプション兼年末懇親会

### 2月～3月 講演会

年1回 会報発行

## 役員の改選及び選任について(平成17年6月9日現在)

役員	現任者	候補者	現職
会長	橋本宗利	橋本宗利	(株)広島ホームテレビ社長
副会長	江川恵司	新任 田中和彦	マツダ株執行役員 業務管理本部長
リーダー	光井安子	光井安子	エリザベト音楽大学非常勤講師
リーダー	山中光	山中光	(株)マルニ会長
専務理事	松原一彦	松原一彦	(株)広島ホームテレビ総務局長
事理		新任 安倍寛信	三菱商事(株)中国支社長
リーダー	金井宏一郎	金井宏一郎	中国放送社長
リーダー	金村武敏	金村武敏	(株)テレビ新広島常務
リーダー	熊平雅人	熊平雅人	(株)熊平製作所社長
リーダー	クリスティーナ・ゼンビラ	新任 アルント・オーバーマイヤー	駐日オーストリア大使館文化担当官
リーダー	後藤文生	後藤文生	広島テレビ放送株社長
リーダー	斎藤忠臣	斎藤忠臣	財広島平和文化センター理事長
リーダー	島田戴平	新任 紙元秀樹	財ひろしま国際センター専務理事
リーダー	難波照雄	新任 杉原一彦	広島エフエム放送株社長
リーダー	福嶋正純	福嶋正純	広島大学名誉教授
リーダー	古川吉彦	古川吉彦	(株)広島ホームテレビ副社長
リーダー	松本卓臣	菅田泰介	福山商工会議所会頭
リーダー	望月成二	望月成二	エビス電工株社長
リーダー	森本弘道	森本弘道	(株)もみじ銀行頭取
リーダー	山本一隆	山本一隆	株中国新聞社副社長
監事	志水省夫	志水省夫	(株)新日放社長
リーダー	寺田達明	寺田達明	中国電力㈱常務

## クリスマス例会

■日 時 平成17年12月13日(火)  
■場 所 リーガロイヤルホテル広島  
■参加者 180名

オーストリア協会で最も人気のある行事、クリスマス例会が今年も開かれました。会では、はじめに橋本会長が「今年の8月にはオーストリア親善訪問を実施しました。今回友好提携の調印を結んだ現地の境日協会の会員が2006年の秋頃来広したいという意向がありその際には特別例会を開きたい」と挨拶しました。

続いて、エリザベト音楽大学の卒業生で結成したグループ、フォー・リトル・ワーズが、モーツアルトの「おもちゃのシンフォニー」や「聖しこの夜」など美しいフルートの音色を響かせ、クリスマスの雰囲気を盛り上げました。

そして、乾杯では、当協会の光井安子副会長が「今月ウィーンで世界の平和を祈念したチャリティーコンサートを開きました。このように広島とオーストリアは草の根レベルでも音楽を通して交流の輪が広がっています。今後とも交流を深めていきたいです」と挨拶しました。

また会では、広島大学と学術交流のあるグラーツ大学から来られたロスリッツ・ロート客員教授や、オーストリアからの留学生ら4人が壇上で紹介されました。最後は、この会最大のイベント大ビンゴ大会が行われました。今年は、法人会員様のご協力で高級家具など5人に1人があたる豪華なものとなりました。

今年のクリスマス例会には会員やそのご家族、友人など180名が出席され、協会のアットホームな雰囲気を楽しめました。

## 活動報告

## ウィーン・フィルハーモニア・ピアノ五重奏団

ベートーベンの後半生とほぼ同時期に生きながら独自の道を歩んだシューベルト。シューベルトと言えば歌曲集「冬の旅」が代表曲と言われているが、今回の演奏会で選んだ曲目は「ます」。「冬の旅」のような独創的な雰囲気を押さえ、ナイーブでしながら気楽に楽しく聞ける点が心地よい、と評判の曲だ。特に第3楽章と第4楽章の弾むような明るい旋律、華やかで力強い曲調は聴衆を引きつけ、室内樂の楽しさを存分に味わわせてくれる。

10月25日、やや肌寒さを感じ始めた初秋のコンサートホールに究極の室内樂を求めて大勢のクラシックファンが詰めかけた。高まる期待を感じつつ18時50分、コンサート・マスター、ウェルナー・ヒンク率いるウィーン・フィルのメンバーとピアノのジャスミンカ・スタンチュールが姿を現した。最初の曲はピアノ三重奏曲第1番。通好み、と表されるシューベルトらしい曲からのスタート。その後15分の休憩を挟んで「ます」へと流れる。今回の弦の編成はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロにコントラバスの4人編成。「ます」の演奏でもこうした海外の演奏家を招いての演奏会の場合、コントラバスを除く編成が多いと聞く。運搬代が恐ろしく高額な点がネックのようだ。よって今回使われた楽器はレンタル。しかし高いレンタル料に高い保険料を払ってでも聞きたいコントラバスの腹に染み渡る低音の響き…ブラボー！ちなみにヒンク氏が持ってきたヴァイオリンはオーストリア国立銀行から代々のウィーン・フィルオーケストラのコンマスに貸与されているストラディバリウス。で、お値段2億円！たかが弦楽器、されど…なのだろう。しかし、持ち運ぶのも心配だ！一方、ピアノは長期のコンサートツアーを行う場合は稀に輸送する事もあるそうだが、だいたいホール所有のピアノを使う。だからピアニストは開演前、非常にナーバスになる人が多

い。初対面の譜めくりさんとの呼吸、フェニックスホールのスタイルウェイの鍵盤の感触を確かめる為リハーサルも念入りだ。この緊張感がたまらない。

開演数十秒前…誰からともなく聞こえる“トイトイトイ”というかけ声。本番前のおまじないらしい。そういえば日本を代表する指揮者・小澤征爾氏も舞台に上がる直前には持参の小さな木を3回、トントントンと叩くそうだ。「頑張ろうね」とか「よおし行くぞ」とかの意味らしい。何だか親しみが沸いてくる。ウィーン・フィルの名手たちが、そしてクラシックがとても身近な存在に思えてきた。次回はどんな演奏会をお届けできるだろうか。クラシックブームの今、大編成のオーケストラなんて味わってみたい、2006年秋には「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」や「ウィーン交響楽団」などの来日が予定されている。お隣ドイツからは広島出身の“時の人”大植英次が首席指揮者を務める「ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー」も6月に来日予定で、偉大なる作曲家・ベートーベンの「運命」を聞かせてくれる。今年、オーストリア協会会員の皆さんはどうなクラシックイヤーの計画を立てていますか？お引越し公演でんこ盛りの2006年、オーストリア協会主催の公演も是非ご期待ください。

HOME 事業部 佐藤直美



## ピアホールの会

- 日 時 7月26日(火) 18:30～
- 場 所 安芸郡坂町鯛尾「マリーナ広島」
- 出席者 75名

ド「BEAT FIVE」の演奏に合わせて会員の皆様がジルバなどダンスに興じていらっしゃいました。

会では、今年入会された会員の方をご紹介した後、会員の上田愛彦さんがオーボエで静かな音色の名曲を披露されました。

会場は、広島湾に臨んでおり夕闇が迫るにつれて遠く海に浮かぶ船や橋のイルミネーションが楽しめ、参加された方たちは夏の素敵思い出をまたひとつくられたようでした。



## オーストリア親善訪問の旅

## 「オーストリア親善訪問旅行」

(株)ファンティック代表取締役社長 加地 トミ

夜…憧れのウィーンへ到着。一晩空港前のホテルに宿泊。翌朝、チロル州のインスブルックへ…

大自然の中、まるで絵巻きのような花に囲まれた町並みをバスの車窓から眺めながら、オーストリアのアルプスへ向かった。

フンガーブルクからロープウェイで中腹地点まで登り、ハイキングを楽しんだ。

私はまるでアルプスの少女ハイジになった気分でカフェテラスへ急いでその時、思わず滑って尻もちをついた。『あつ…皆さんに心配をかけてしまう』と焦れば焦るほど私は…立てなくなっていた。皆さんの優しい笑いに包まれ、ようやく立ち上がった私に、山登りのベテランの方が、ハイキングの歩き方を御指導して下さった。そんな和やかな雰囲気の中、素晴らしい天候に恵まれ雄大な自然をたっぷり満喫しながら、私は恐らく…この旅はきっと素晴らしい旅になるだろう…と予感した。

次に訪れたインスブルックは、古くはローマ帝国時代か



ら栄えハプスブルク家によってさらに大きくなった街。旧市街を散策すると、王宮、宮廷教会、石造りの建物から歴史を誇る古都を自分の足で歩ける感動をかみしめた。

そして…ドイツミュンヘンでは、オリンピックタワーの展望台からミュンヘン市内を一望しながら、今年開催されるワールドカップのスタジアムを見て、すごいすごいの連発。

またミュンヘンのゴシック様式の新市庁舎の名物ドイツ最大のからくり時計の迫力はすごく、新市庁舎の前では記念撮影が絶えなかった。ドイツの最終日はビアホールで賑やかにビールを楽しんだ。そして早いもので、旅は中盤を迎える後半へと移り、スロバキアへ入国。広場では露店が出ていて買物を楽しんだ。プラチスラバ城から眺める街並みやドナウ河に自然の雄大さを感じた。

そしてウィーンへ。ウィーンといえば、やはり大きな目玉はシェーンブルン宮殿だろう。

1740年、マリア・テレジアがハプスブルク帝国の支配者になった。(マリア・テレジアは正式には皇帝ではない)マリア・テレジアは1717年に生まれ、父の皇帝カール6



(前列左から4人目が筆者)

世が亡くなりハプスブルク帝国の支配者となったのが23歳の時。マリア・テレジアは家柄にこだわらず、義務教育を導入し、医療制度の改善、税制の見直しなど改革を行いました。オーストリアの近代化に努めた…。マリア・テレジアが数々の目覚しい功績を残せたのは、フランツ・シュテファンという良き夫がいたことを忘れてはならないであろう。

憧れのシェーンブルン宮殿に足を運ぶと、今年生誕250周年を迎えるモーツアルトの可愛らしいエピソードを思い出す。神童6歳のモーツアルトが演奏を終え下がろうとしたとき、床に転んだ。その時、マリア・テレジアの末娘であるマリー・アントワネットが手を添えて起こした…。感激したモーツアルト少年は「僕の未来のお嫁さん」とプロポーズをしたという…鏡の間を見た時は嬉しくて感動のあまり言葉にならなかった。

シェーンブルン宮殿には、ハプスブルク家の歴史が凝縮され、当時の夢や希望が封じ込まれているように思えた。

そしてメインイベントの9月5日。奥日協会と広島オーストリア協会は、友好提携を結んだ。厳肅な空気のもと、橋本会長・オズワルド・カドレチェック会長によって友好提携宣言、そして調印式が行われた。

そのとき私は、ウィーンには世界遺産が二つ、ウィーン歴史地区とシェーンブルン宮殿があり、広島にも厳島神社と原爆ドームがある…そのような共通点に不思議ないにしえを感じざるを得なかった。

こうして8日間の旅は終わったが、この旅での喜びは、終日良き天候に恵まれたこと、皆さんと年代をこえ温かな交流を持てたこと、そして友好提携という素晴らしい式典に参加ができオーストリア・ウィーンという国が身近に感じられたことである。



(友好提携調印式)

## 「オーストリア親善旅行記」

広島信用金庫理事長 高木 一之

9月1日夕刻、我々一行30名は広島からのチャーター便で待望のウィーンに到着。機内から美しい田園風景、森そしてドナウ河を眺めながらのウィーン入りであった。

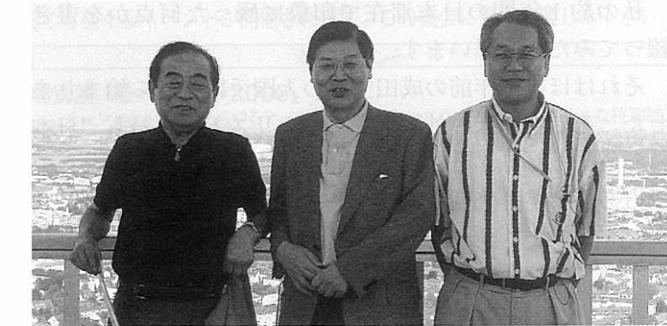
美しい自然そして歴史、文化、芸術を誇る国—それがオーストリアに対する私の漠然としたイメージであったが、今回はそれをこの目で確認し、また感動を重ねる旅であった。

最初の訪問は9月1日—チロル州都インスブルック。ハプスブルク家ゆかりの地を散策し、フンガーブルクからロープウェイでオーストリアアルプスの雄大な山並みを満喫。山上では羊の出迎えを受け、孫の大好きな“アルプスの少女ハイジ”を連想。車窓から冬季オリンピックのジャンプ台を遠望。

9月2日、3日—陸路ミュンヘンへ。ニュンフェンブルク城を観光。バロック様式の建築美に圧倒される。美術館では、ゴッホ、マネ等の名画を堪能。オリンピックタワーからは城郭都市ミュンヘンの街並み、そして来年のサッカーワールドカップ競技場を遠望。日本チームの活躍を祈る。夜はビアホールで大いに飲みかつ喋りストレス発散。

9月4日—スロバキアの首都布拉チスラバへ。タイムスリップした様な中世の佇まいを残した石畳の街を散策。布拉チスラバ城から美しいドナウ河と市街を眺望。社会主義時代の傷跡も散見、胸痛む。

9月5日、6日—ウィーンに戻り世界遺産のシェーン



(写真中央が筆者)

ブルン宮殿そしてベルヴェデーレ宮殿を見学。その広大さ豪華さ—ハプスブルク家の栄華を改めて実感。同時に権力のすさまじさと人間の欲望の際限のなさにいささか空しさを覚ゆ。音楽の都でオペラも楽しむ。最後の夜は今回の親善訪問のフィナーレ、広島オーストリア協会・奥日協会友好提携調印式が橋本、カドレチェック両会長により行われ、引続いて我々を含む両国の出席メンバーでの交歓会。大いに盛り上がる。

あつという間の8日間の旅であったが感じたこと二点。第一点は、橋本団長、熊平副団長の歴史に対する造詣の深さ。ガイド役のイップ常子さんとの丁々発止のやりとりを聞きながら、今後は少し歴史の勉強をして旅行しないと単なる物見遊山に終ってしまう反省大。第二点は、オーストリアの牧歌的な風景、ゆっくりした生活リズム—日本人の忘れ物を見た思い。心のいやされる旅であった。

最後にメンバーの方々との暖かい交流に感謝しつつ筆を置く。

「広島オーストリア協会と  
奥日協会との友好提携調印式」

親善訪問団の最終日の9月5日、広島オーストリア協会と奥日協会との友好提携調印式がウィーンのオペラハウスの直ぐ側にある莊厳な雰囲気の漂うエロイカホールで行われました。

調印式は、橋本宗利当協会会长とオズワルド・カドレチェック奥日協会会长との間で行われました。今後、両協会は双方の相互交流を進め、文化、芸術、経済など各分野の市民交流を支援するなどしてウィーンと広島及びオーストリアと日本の相互理解と親善を推進しようというものです。

調印式には梅津至駐オーストリア大使とペーター・モーザ駐日大使も立ち会いのもと両協会のメンバーの代表らが見守る中で和やかに行われました。式で(パーティ)



(調印文書)

は梅津、モーザ両大使のお祝いのあいさつと東京とニューヨークを舞台に活躍中のピアニストモーツアルトの名手、リサ・中道さんも遠路東京からボランティアで参加、ベートーベンやモーツアルトの名曲の熱演で調印式に華を添えてもらいました。ちなみに、会場となったエロイカホールは王宮の一部でベートーベンが作曲したピアノ協奏曲第4番「皇帝」が初演された由緒ある場所です。

引き続き、会場の隣りにある日本レストラン「優月」で奥日協会との合同パーティーが開催され広島—ウィーン間のチャーター便に乗務したオーストリア航空のライト・アテンダントの対馬伸子さんら4人も参加して総勢80名余りとなりました。双方の参加者は時間の経つても忘れて非常に盛り上がりオーストリアと日本の歌が飛び出すなど大変素晴らしいパーティとなりました。まさに広島とウィーンの距離が一挙に近づき「友好提携」の第一歩となりました。

## 日本を“翻訳”する

アンドレア・ヴァルドブルンナー

私の約1年間の日本滞在で印象に残った何点かを書き綴ってみたいと思います。

それはほぼ一年前の成田空港の入国手続きから始まりました。そして一人の外国人ジャーナリストすなわち“日本特派員”として、それはまた別の意味で大変挑戦的なものもあります。来日前、私は母国オーストリアの全国紙「スタンダード」の政治担当記者でした。現在は“東京特派員”として日本の社会情勢から日常生活に至るまで様々な事を取材し、オーストリア国民に「日本」を理解できるよう心がけて記事を書いています。それはまさに日本とオーストリア両国の相互理解の促進に貢献できるのではないかと思っています。

例え、昨年の総選挙でいかにして「小泉自民党」が大勝したか…。また、「日本経済」がバブル経済破綻後の長い不況をどのように克服し復活したか…。さらに「ホリエモンとライブドア問題」の社会的影響など…。日本の国内ニュースを取材し、記事にする事は私自身が視点を変えて外国での事象をヨーロッパの読者に“翻訳”する事でもあります。私この“翻訳”作業?を通じて日本社会の伝統的な習慣を学んできました。日本語が不自由な私にとって取材活動は大変難しく非常に勇気のいることでもあります。

私は東京に到着した時、日本の官僚主義や官庁との交渉の仕方や記者クラブ組織など取材のシステムなどは全く知りませんでした。最近やっと「日本スタイル」に少しあはれてはきましたが、やはり外国での記者活動は大変難しいと言う事を痛感する毎日です。

しかし、昨年の広島での「被爆60周年の平和関係取材」の経験は大変印象深いものでした。それは私の主人すなわち在日オーストリア大使館文化担当官のアルノルト・オーバーマイヤーが広島オーストリア協会の年次総会に招待され一緒に広島を訪れた時のことです。

私は世界平和の原点ともいえる原爆慰靈碑の前に立ち、これまで多くのジャーナリストや作家が記述した記事や書籍を通じて学んだ「ヒロシマ」を思い起こしました。原爆資料館の見学で「原爆の実相と惨状」に大きなショックを受けましたが、年老いた多く被爆者らが自らの体験をもとに「核兵器廃止と世界平和」を求める国内外で熱心に活動を続けてることにも大変感動しました。当然、取材したことを原稿にまとめオーストリアの新聞社と通信社に送りましたが、多くの読者が目を通し「ヒロシマ」をより理解してくれたことだと思います。

次に、日本のシンボルである富士山の話題です。「富士山に登らなければ日本に来た意味がない」と知人や友人にそそのかされて、私は一大決心をして「富士登山」を決行しました。私の父はアルプスを愛する大の登山家ですが、「日本の最高峰に登山する」と言つたら大変関心を示していました。標高約4000メートルの「神聖なる山」への登山をワクワクしながらその日を待ちました。年間約20万人の登山者があるとのことで、しかし一般登山が解



禁されるのは7月と8月の2ヶ月間だけで、麓から登山するではなくバスで5合目まで行き、そこから行列をなして頂上を目指して登つくる人々の姿はまさに“民族大移動”的な様相で私には大変異常な光景に見えました。それも礼儀正しく列を成して登山する姿は異様な感じがしました。山岳国のおーストリアではトレッキング中や登山中にはほとんど人に出会うことはありません。それに登山道には木の切り株や岩などに赤や白の道標があるくらいで日本のように舗装されていることなどは考えられません。私は行楽地に行くような軽装や本格的な登山スタイルなど様々な格好の登山者に挟まれ、かなりの時間を経て、息を切らせながら頂上にたどり着きました。そして、多くの登山者がそれぞれ手を合わせてご来光を仰ぐ風景…すなわちこの東洋の神秘的な“儀式”に感動しました。そして、私は「富士登山」を成し遂げ満足しましたが、何故か再び富士山には登山したくない複雑な気持ちでした。

そして、日本の国技「大相撲」についてです。最近は非常に関心をもってテレビ観戦します。当初、相撲は太った力士同士が押したり突いたりする単調な競技にしか見えませんでした。しかし、国技館で大相撲をじっくり観戦してからすっかり虜になりました。“神聖な土俵”で力士と力士の力と力のぶつかり合いそれもスピード感があふれ大変洗練された技を競い合う奥の深いスポーツ…それが相撲だと判りました。勿論、私と主人はブルガリア出身の“琴欧洲”的の大ファンです。出身地のブルガリアはウィーンから2時間位の距離で大変親しみが湧きます。そして、モンゴル出身の横綱“朝青龍”との対戦は最もエキサイトします。いまやすっかり相撲の大ファンになりました。

ともかく、やっと異文化の中の日本滞在の生活が1年を経過し、日本の社会が多少でも理解できるようになりました。でもまだ判らないことばかりです、予定ではあと2年間日本滞在しますが、好奇心とチャレンジ精神で日本の歴史や文化そして日本の社会をしっかり学びたいと思います。

(アルノルト・オーバーマイヤー駐日オーストリア大使館文化担当官夫人)

## 略歴／1969年 オーストリア・リンツ市生まれ

1994年 ウィーン大学大学院 通信科学及び政治学修士課程修了  
1996年～1999年 リンツ大学コミュニケーション学科助手  
1998年～2000年 オーストリア放送協会リンツ放送局記者  
2000年～2005年 「スタンダード」新聞社(ウィーン)  
政治担当デスク  
2002年～2004年 ウィーン大学 情報科学部  
(ジャーナリズム)講師  
2005年2月～ 「スタンダード」新聞社 東京特派員

## トピックス

## モーツアルト生誕250周年

今年はモーツアルトの生誕250周年を記念してオーストリアはもちろん日本国内でも様々なイベントが開催されます。この機会に是非お楽しみ下さい。

## 海外イベント

## 特別展「モーツアルト2006」

モーツアルトを巡るあらゆるテーマを追求したかつてないセンセーショナルな特別展。(～9月17日 ウィーン アルベルティーナ美術館)～(社)日本海外ツアーオペレーター協会HPより

## オペラ ザルツブルク・フェスティバル

わずか6週間でモーツアルトの全音楽作品を上映。(～8月31日 各祝祭劇場他)

## ベスト・オブ・モーツアルト29の特別コンサート

2月～週末29回にわたって世界中のモーツアルトファン待望の作品を集めた特別演奏会。(～11月18日 ザルツブルク モーツアルトウム大ホール)

## モーツアルト ミサ曲

それぞれのミサ曲が初演された教会が再び会場に。(通年 ザルツブルク大聖堂他教会)

## 特別ガイドツアー モーツアルト時代の庶民の生活

衣食住など庶民の生活ぶりが、厳密に再現され、遠い過去の世界へタイムスリップできます。(～11月1日 ザルツブルク野外博物館)～オーストリア政府観光局公式HPより

## 旅行

## ウィーンとザルツブルク音楽祭7日間

(7月25日(火)～31日(月)、8月1日(火)～7日(月))  
※お問い合わせ JTBロイヤルロード銀座 フリーダイヤル0120-777-815

## 講演会

■日 時 3月14日(火) 18:00～

■場 所 ホームテレビ多目的ホール

■参加者 97名

17年度協会締めくくりの行事である講演会は、広島平和文化センターのシュテファン・ベルガーさんが「オーストリアと日本」という題で講演しました。講演会には97名の出席者がありました。講演に際しベルガーさんは「こんな大勢の人の前でお話をすることはあります。記念に写真を撮らせて下さい」と自らのカメラで会場を撮影し講演を聞きにきた人たちの心をつかみました。日本語(広島弁?)の堪能なベルガーさんは、日本人に、日本語で話し掛けても英語で返事が返ってくることや、ホームステイ先の2歳の男の子とドイツ語で話が出来て嬉しかったエピソードなどを紹介し、「日本人は相手の気持ちを大切にする人々ですが、オーストリアの人とも



相手を本当にわかりたいという気持ちがあつたら言葉の壁があつても通じると思います」と語りかけました。また講演会の後半では、フルートの勉強のため1980年代にウィーンに留学されていた広島国際大学の小坂助教授も加わり、ベルガーさんはお好み焼きは大好きですが甘酸っぱい梅干が苦手なことや「カースノルン」というジャガイモ・チーズ・ミントの入ったギョーザのような故郷の食べ物が恋しいことなど食べ物の話を中心に話がはずみました。オーストリアの魅力を披露し、世代間のギャップを越えた軽妙なトークに会場は笑顔に包まれていました。

## オーストリア講座「音楽都市ウィーンを満喫」

3月2日(木)坂町市民センターで、オーストリア講座が開かれました。講師は広島国際大学助教授で、広島オーストリア協会運営委員の小坂哲也さんと夫人の晴代さんです。

坂町市民センターでは、毎年3～5回交流講座を開いていますが今回は、オーストリアの食文化や国民性、モーツアルトなどオーストリア出身の作曲家の話をテーマに約



## ～世界に響け平和の調べ～ ウィーンで音楽交流

原爆投下60年を迎えた昨年12月、世界各国の音楽家が参加したチャリティーコンサートがオーストリアのウィーンで開かれました。コンサートを開いたのは「希望のしらべ」実行委員会(委員長：平岡敬前広島市長)という市民グループです。

コンサートでは音楽家で広島オーストリア協会の光井安子副会長のほかイギリスやスロベニアなど6カ国およそ30人の音楽家が

参加し、原爆詩人の故栗原貞子さんの代表作「生ましめんかな」の朗誦やバイオリンが奏でられました。会場では広島の市民が作った平和を祈るメッセージ入りの折鶴が入場者に手渡されました。

コンサートの収益金は Chernobyl 原発事故の被害者支援に使われます。

## 寄稿

### 音楽で溢れる街ウィーン

声楽家 奥村 泰憲

今年はモーツアルト生誕250周年で、ウィーンをはじめオーストリア各地でも活気溢れています。その記念すべき年を狙って!?という訳ではないのですが、音楽の修行に来て8ヶ月がすぎました。

私と妻はエリザベト音楽大学で声楽を学び、大学院修了後、私は小学校に、妻は高校に勤め、3年間働きました。勤務していた安東小学校では子供たちから多くのことを学び、毎日が感動の連続で、充実した日々でした。そんな子供の純粋さに触れる中で、今まで心の底に潜在していた芸術への志が再び湧き上がったのです。

2004年にウィーンから帰国したばかりの友人から次のようなことを聞きました。他の大都市とは比較にならないくらい、ウィーンでは毎晩のように世界的に有名な演奏家のオペラやコンサートが上演され、しかもウィーンフィルハーモニーが演奏する国立歌劇場のオペラがなんと立ち見で2ユーロ(約280円)であることや、街の至る所にある教会では宗教音楽のコンサートが無料であったりすること、そして小さな音楽会も合わせれば一晩に100箇所ぐらいの演奏会が開催されているという、耳を疑うような情報でした。またハイドン、モーツアルト、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームス、ブルックナー、マーラーなどが活躍した地もあり、その天井人の名前を列挙されたときにはノックアウトでした。そんな魅力に心引かれ、今まで広島市にしか住んだことのなかった私達にとって海外に住むということは一大決心でしたが、超一流のものをどうしても聴きたい!という切なる願いで音楽の都ウィーンを選びました。

2005年6月20日にウィーン空港到着後、その日の宿も決まっていない状態からのスタートでしたが、生活をしてみると実に快適な街です。音楽以外にも魅力はたっぷり。オーストリアは8ヶ国に隣接し、スロヴァキア、ハンガリー、チェコ国境付近の町までは一時間ぐらいで行くことができますし、格安バスを利用すると千円程度で往復できます。スロヴェニア、イタリア、ドイツ、スイスにも数千円で行くことができます。その上ウィーンは民族のるつぼであるがゆえに、いろんな国の人と知り合い、文化、政治



(オーストリア在住の広島県出身者が集まったパーティにて)



(奥村さん夫妻)

経済、宗教、歴史など興味深い話が聞けるのも大きな魅力の一つです。またここで感激したことはウィーンの広島県人会をはじめ、日本人会など邦人のネットワークが非常に素晴らしいことです。また他のヨーロッパの国々と違ってここでは水道の水が思う存分飲めることなど、生活するにとても良い街です。

多くの方々のお陰で、昨年10月にウィーン国立音楽大学に入学することができました。世界中から集まる優秀な若い演奏家たちは、とても刺激を与えてくれます。まだまだ苦闘の毎日ですが、少しでも多くのことを学びたいと思っています。

広島しか知らない自分が、井の中の蛙であったと感じることは多々ありました。しかし日本が国際評価を得ていることも知りました。音楽に関してもそうです。離れてみて分かったのですが、日本の音楽文化は非常に高いことが分かりました。広島も例外ではありません。音楽の花が多く咲いている街であると感じています。もちろん広島には更なる発展を願って創造性のある芸術活動を切望しますが、以前あまり自信を持てなかつた自分にとって、広島の地で20年以上学んだ多くの事に誇りを持てるようになった事は、ウィーンに来て良かったと思わせてくれる事の一つです。自分がかつて在籍した広島少年合唱隊やエリザベト音楽大学、そしてオペラ団体や合唱団など数々の広島の音楽団体は誇るべき文化財産だと思っています。

7年前1999年のことですが、21世紀を迎えるにあたつて新聞で目にした記事がありました。“21世紀の外交は、文化交流が鍵になる”という内容で、それに感銘を受けて以来ずっと心の奥にその言葉が潜んでいました。今その実践に向けて前進。音楽を通して、国際社会に役立てることができれば幸甚です。

被爆三世としてヒロシマの心を歌うこと、ライフワークにしたいと考えています。ただ広い視点で臨まないと意義を損ねるので、いま多くの国際人と共に学べる環境にあることにとても感謝しています。

芸術の道もまた険しく長い道のりです。孔子の言葉で『四十で心惑わず、五十で天命を知る』という明言があります。私もあせらず一步歩前進していきたいと思っています。

## 寄稿

### オーストリアでバドミントン

田中 雅彦

私、田中雅彦はウィーンに来て13年。妻、利香は3年になります。音楽の都と言われるウィーンですが、音楽とは縁が無い私たちが楽しんでいるのはバドミントンです。

私がバドミントンを始めたのは12歳の時。日本の中学、高校でバドミントンをやりましたが、当時は無名選手でした。10年のブランクを経てウィーンでバドミントンを再会したのは27歳の時です。たまたま、オーストリアで開催されたホビーの大会に出ようと友人から誘われ、筋肉痛と戦いながら運良く全国大会に出場。その後、ウィーンのクラブチームから誘われ、プロのバドミントンプレイヤーになりました。

日本での強制的な集団練習に疑問を持っていた私はこちらのクラブチームの自由な雰囲気に大きな魅力を感じました。練習メニューは自由で、試合が中心です。皆元に角スポーツを楽しんでいます。また、年齢、職業、国籍に関係なく、誰でも公式戦に出場することが可能で、実力があれば誰でも上に行けます。これらのスポーツ組織は本当にオープンだと実感しました。私も地元の小さな大会からスタートし、ウィーン州大会のシングルス、男子ダブルス、混合ダブルスで優勝。オーストリア代表として全英オープン、ジャパンオープンにまで参加する事が出来ました。オーストリア代表としてジャパンオープンに参加し、代々木体育館でシャトルを打ったのは不思議であり、充実した瞬間でもありました。

妻もこちらに来てすぐにバドミントンを始めました。妻は初心者でしたが、クラブの皆が温かく迎え入れてくれて、楽しく練習することが出来ました。最近では私と混合ダブルスを組んで公式戦にも出場、ウィーン州大会で4位に入りました。また、ウィーンにはこちらに住んでいる日本人のバドミントンサークルもあり、私が指導を担当、妻も毎週末楽しくバドミントンをしています。

最近では日本からテレビ局の取材も来ました。テレビ朝日の「ポカポカ地球家族」という番組で、取材チームがウィーンに1週間滞在しました。妻がウィーンのカフェを案内し、私がバドミントンの練習風景、公式戦などを紹介しました。ウィーンの美しい街やヴァッハウ渓谷の風景なども取り入れて、見事に視聴率11%を達成し、テレビ局も喜んでいました。音楽以外のウィーンを紹介出来たことは画期的であったと思っています。

私は今年40歳になります。バドミントンの試合は1日で2~3キロ痩せるほどハードで、シングルスなどは最近苦しくなりましたが、これからも現役を続けて行きたいと思っています。オーストリアに来てからこなした公式戦は約1500試合になりますが、是非2000試合を達成したいと思っています。スポーツを楽しむことを教えてくれたウィーンの人たちに感謝しています。

### ウィーンでのゆとりある生活

田中 利香

主人と結婚してウィーンに渡り3年半が経過しました。最初は戸惑うことが多かったのですが、今ではウィーンでの生活を楽しめるようになりました。

ウィーンでの生活で一番の贅沢は「ゆとり」です。残業はほとんど無く、ほとんどの会社がフレックスタイム制のため、マイカー通勤して遅刻しても大丈夫です。早く帰宅したい日は早めに出勤します。金曜日もほとんどの会社でお昼で勤務終了、長い週末を楽しむことが出来ます。休暇も年に6週間あり、夏などはバカンスのために工場が閉鎖されます。我が家もその恩恵でのんびりとした生活を送っています。時間に余裕があるために余暇も充実しています。こちらでは仕事帰りのサラリーマンは飲み屋ではなく、劇場・オペラやスポーツセンターに通います。もちろん家族と一緒にです。我が家は劇場・オペラが苦手で、主人がバドミントンをやっているので、よく一緒にスポーツセンターに行きます。スポーツセンターはウィーン市内に20ヶ所以上あり、バドミントン以外にテニス、スカッシュ、ジム、サウナなどが常設されていて便利、そして安価です。そして最高の楽しみは冬のスキーです。大学時代にスキー部に所属していた私にとってはオーストリアのスキー場は夢のようです。ウィーンから1時間余りで大きなスキー場に行くことが可能で、リフト代も比較的安価でしかも日本に比べたらガラガラです。コースは急で初心者には恐怖のよ

うですが、その景色は本当に美しいものです。スキーをしなくとも、頂上に登ってホットチョコレートを飲んでいるだけで十分楽しめます。

主人がやっているバドミントンのお陰で、一度「テレビ局が取材」に来たのも楽しい思い出になっています。テレビ朝日の「ポカポカ地球家族」という番組でしたが、取材チームは1週間ウィーンに滞在、バドミントン以外にウィーンのカフェ、ヴァッハウ渓谷などを紹介することが出来ました。番組は本当のウィーンに比べると少し美しく演出されていますが、この街では工夫次第で楽しく生活出来るのは事実です。ウィーンの不便な面は人々がゆとりを持って仕事をしているためなのではないかと思います。



(田中さん夫妻)

モーツアルト生誕250年記念クラシックコンサート決定!!



©ANTO/Gesell der Musikfreunde

2006.6/24(土) 15:00開演 広島郵便貯金ホール  
(14:30開場)

広島オーストリア協会主催、恒例クラシックコンサート

2001年「ライナー・キュヒル ヴァイオリンコンサート」

2002年「天使の歌声～ウィーン少年合唱団」

2003年「ルドルフ・ブッピンダーピアノ・リサイタル」

2004年「ウィーン・モーツアルト・オーケストラ」

2005年「ウィーン・フィルハーモニア・ピアノ五重奏団」

……そして今年は、

モーツアルトのスペシャリストたちの演奏

をお楽しみください。

広島オーストリア協会が  
自信を持ってお届けします。

オールモーツアルトプログラム

セレナード第2番 へ長調 KV.101

ディヴェルティメント第11番 ニ長調 KV.251

ディヴェルティメント ニ長調 KV.136

交響曲第40番 ト短調 KV.550

※プログラムは変更になる場合がございます。予めご了承下さい。

今年はモーツアルト生誕250年の年にあたり、世界各地で様々な記念イベントが開催されています。ザルツブルク室内管弦楽団はモーツアルトが生まれ25歳になるまで過ごしたオーストリアの一都市ザルツブルクより来日。同楽団を設立した指揮者ハラルド・ネラートはヴィオラ奏者を経て室内楽に集中的に取り組み、プラハ国立歌劇場管弦楽団をはじめ数々の指揮と芸術監督を務めた実績を持つ

ています。モーツアルト音楽の伝統を守り、その良さを伝えている名手たちも今回は5度目の日本ツアーとなります。本公演では癡しの小曲集「ディヴェルティメント」とモーツアルトを語る上では欠かせない哀愁の楽曲「交響曲第40番」を軸に、珠玉の室内楽をお届けします。

投稿をお待ちしています

①オーストリアの旅の思い出・生活・習慣・芸術のこと・オーストリアの友人の話・その他何でも結構です。会員の皆さまからの寄稿を募集します。お名前とご連絡先を明記して協会事務局へお送り下さい。原稿用紙400字詰3枚以内、関連する写真(あなたと一緒に写っていればなお結構)を1~2枚付けて下さい。ただし事務局で手直しさせていただきますことがあります。掲載分にはささやかなプレゼントを送らせていただきます。(ご投稿の写真は後日お返しいたします)

②会員が主催するコンサートなど催し物の情報、会員の動向・消息・会報への提言・協会への希望も、できれば①と同様、お名前などご記入のうえお送り下さい。なお会報への提言(400字程度)・協会への希望は住所のみ、無記名でも結構です。

①、②どちらも原稿の返却はいたしませんのでご了承下さい。

編集後記

昨年10月から人事異動のため担当が弘中から中本に代わりました。  
中本:皆様どうぞよろしくお願ひいたします。昨年8月にウィーンに行く機会  
があり、街全体を包み込むその文化的な香りに魅了されました。是非また行きたーい!という夢を抱きつつ...事務局頑張ります!

\*今回の発行では、ウィーン在住のイップ常子さんのご協力により、奥村・田中夫妻のすばらしい原稿をいただきました。